

「弱い絆」と「強い絆」の強みと弱み

一公立中学校における教育困難性のケーススタディ

○松田恵示（東京学芸大学）

1. はじめに

本報告は、約3年間にわたる公立中学校での教育改善に関するアクションリサーチ(AC)に関わって、特に、生徒の人的ネットワークの観点からまとめたものである。

対象となったA中学校の生徒と「親」との関係は、進路選択時に「強い信念と教育責任」が得られない家庭環境からして、それは「強い絆」にはなり得ない面がある。また、秩序の保持や「学力保障」といった社会的責務に疲弊する教師においても、「強い絆」を形成しにくいといつてよい。

しかし、逆に「放り出されている」がゆえに、主体性の強い彼らにとっては、「親」や「教師」、さらには学生TAが「弱い絆」を形成する「ノイズ」として立ち現れており、他方で、高校進学後も結ばれる仲間という「強い絆」を持つために、現代社会における「生きやすさ」を「荒れの中」に感じている。いくつかの調査を総合的に考察することから、教育困難性のケーススタディに見られる生徒の人的ネットワークの機能と構造について検討してみたい。

2. ACの背景

報告者は、2012年度より、いわゆる「荒れ」の激しいA中学校に外部協力者(研究者)の一人として、学校改善を目指した教育実践に参加することになった。

アクションリサーチの対象校となったA中学校では、AC参加当初、授業中の出歩き、大声を出す等の授業妨害、対教師暴力、器物破損といった行為が頻出していた。

こうしたなかで、ここで取り上げる生徒Oは、この「荒れ」の「一軍」となっていた生徒で、普段は明るく気さくであるが、特に「一軍」が集団的に問題行動を起こす時には「つるんでしまう」タイプの生徒であった。この生徒は、現在は高校2年生となっており、継続的にインタビューに応じてくれている調査協力者でもある。

このOを中心として、教育困難性のケーススタディに見られる生徒の人的ネットワークについて少し検討することとする。

3. 「商業科」への進学

事例1

B：だから、高校抜けたら、就職じゃなくて専門学校か大学に行きたいんですよ。だからそのためにでもちょっとでも貯金しておけば楽になるんじゃないかなと思って、思ったりします。

C：その専門学校とか大学に行きたいっていうのは、何でそう思ったん？

B：何かコーチのあのサッカーのトレーナーとかになりたいんですよ。で、最初は体育教師だったんですけどだから大学に行けるように、高校もスポーツ系のところ行こうってX先生と話してたんですけど、でも、とりあえずちょっとサッカー先輩に誘われたんで、で、大学、まあ、専門学校なんか、トレーナーになっても食っていけないよって言われて、で、だからどっかのスポーツジムの社員になってたほうがいいって言われて。まあでも、そのためにでもちょっと体育の先生にちょっとでも近づけたらなと思って。

これは、Oが卒業後、高校生の初めての夏休みのときにインタビューした内容の一部である。中学卒業時にサッカーが得意だったOが、「体育の先生」になりたいという漫然としたキャリア意識を持っていたことを伝えてくれている。そして、このことをめぐって、教師と部活動の先輩の二人が「登場人物」として語られているところである。

しかし、Oが進学したのは、公立高校の「商業科」であった。Oが目指すものが変わったわけではない。Oは、ここで「商業科」に進学した理由について語っているのである。Oは、もちろん「普通科」も検討しなかったわけではない。ただ、偏差値的に少し「怪しさ」があったことと、教師ではなく先輩の情報を優先させ、現在進学した高校は、大学のオープンキャンパス等に積極的に誘ってくれるので、Oの進路からすると、こちらの方が「適切」だと判断したのである。

進路選択時に、「強い絆」を持つ大人との接点がないOは、このように一般的には「辻褃の合わない」進路選択を、「偏った情報」から判断したと見えなくもない。確かに情報の偏りは、「選択の自由」

を潜在化させ、彼を取り巻く経済的困難性や教育支援の必要性を浮かび上がらせる場面であるという見方もできる。

4. 「弱い絆」の強み

ここで取り上げてみたいものが、Mark Granovetter の” The strength of weak ties(弱い絆の強み)”にかかわる議論である。よく知られた、求職者のジョブマッチング・メカニズムを明らかにするために、アメリカ都市部郊外在住の 282 人のホワイトカラー(弾性)を対象に行われた調査によって、弱い人的ネットワーク(親友や家族などの強さのない「遠い関係」)が契機となって転職した人の方が満足度は高いことを明らかにした研究である。これは強い人的ネットワークでは、お互いにすでに知っている情報の流通になることが多く、反対に弱い人的ネットワークでは、まだわからない、だからこそ「重要なもの」がもたらされるからではないかと説かれている。

このグラノヴェーターの議論に触発されて、東浩紀も、現代社会における「弱いつながり」の意義を強調し、「Google が予測する検索キーワード」から逃れるための方法として、「観光客」のメタファーからなる「ノイズ」を抱き込む戦略を唱える。一見、開放性に富むようにみえる「ネット」世界は、実は検索語の学習機能(ビック・データーの存在)からも、実は知識の「蛸壺化」を進め、そこでのコミュニケーションは Line に代表されるように、強いつながりをますます強くしていく。つまり「村人化」を進めるのである。そうした「不自由さ」から逃れるために、人は「旅人化」を志向するが、環境によって形成されるしかない人間のありようからしたときに、環境の外部に「旅人」として離脱することはある種の幻想でしかない。むしろできることは、弱いつながりを形成し、「ノイズ」を発生させることによって、いわば「検索用語」を偶然化することである。

東はこうに述べて、予測不能な検索キーワードを導きだす社会との関わりかのメタファーとして「観光客」という言葉を使う。無責任で流動的な弱い人的つながりと、村人的「強いつながり」の 2 つのネットワークの複数性が、現代社会における「生きやすさ」を生み出すのではないかと、デリダ、ローティエ等を下敷きにして論じている。

このような視点から、当該の O を見たときに、まず彼と「親」との関係は、進路選択時に「強い信念と教育責任」が得られない家庭環境からしても、それはそもそも「強い絆」にはなり得ない面がある。また、秩序の保持や「学力保障」といった社会的責務に疲弊する教師においても、「強い絆」を形成しにくいといってよい。しかし、逆に「放

り出されている」がゆえに、主体性の強い彼らにとっては、「親」や「教師」、さらには学生 TA が「弱い絆」を形成する「ノイズ」として立ち現れており、他方で、高校進学後も結ばれる仲間という「強い絆」を持つために、現代社会における「生きやすさ」を逆に感じている、ということになるのではないか。

それとともに、中学校における教師が、生徒にとってむしろ「弱いつながり」のなかにある「ノイズ」として、実は生徒にとって大きな意味を持って存在している、ということ、A 中学校の現実を示唆しているようにも思われる。

例えば、川村は、1970 年代から 80 年代の中学校の「荒れ」を経験した校長のライフヒストリーから、「制度」から「人格」へと、中学校における教師文化が権威の基盤をシフトさせていると論じている。

しかし、そのような「人格的権威」が前提とする「強いつながり」は、A 中学校には存在していないように見える。そしてその結果、例えば国立教育政策研究所が 2013 年に実施した、「公立高校の中途退学発生プロセスについての調査研究」において、高校 1 年生における中退者が入学者の 2.0%であり、そのうち、10 月までに中退したものが 36.8%となっていることと比較して、本報告における調査対象となった A 中学校の昨年度の高校進学率は 100%(定時制・通信制含む)、そして、卒業後の 10 月の時点で、学校ならびに教育委員会が把握している高校中退者はゼロであることを考えると、こうした中退率の低さは、彼らが実は人的ネットワークとして身にまとっている、「弱いつながり」が持つ「強み」が顕現されているのではないか。定時制への進学率(約 18%)が高く、進学先が国立政策研究所の調査対象より都市部にあること(例えば東京都の定時制中退率は平成 23 年度で 12.1%)が予想される地理的環境を考えると、なおさらである。

引用文献

Granovetter, Mark;(1973)"The Strength of Weak Ties"; American Journal of Sociology, Vol. 78, No. 6., May 1973, pp 1360-1380. [マーク・グラノヴェーター (大岡栄美訳)「弱い紐帯の強さ」野沢慎司(編・監訳)『リーディングス ネットワーク論-家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房,2006 年]

東浩紀、『弱いつながり—検索ワードを探す旅』、幻冬舎、2014 年

川村光、1970-80 の学校の「荒れ」を経験した中学校教師のライフヒストリー・教師文化における権威性への注目、教育社会学研究第 85 集、2009